

【書評】

山出裕子著

『移動する女性たちの文学——多文化時代のジェンダーとエスニシティ』御茶の水書房、2010年

Yamade Yuko, *La littérature de femmes migrantes : Une étude des genres et des ethnicités à l'ère du multiculturalisme*,

Ochanomize-shobo, 2010.

加納由起子

KANO Yukiko

2009年に『ケベックの女性文学——ジェンダー・エクリチュール・エスニシティ』（彩流社）を上梓したばかりの山出裕子が、それからわずか1年半のうちに新しい現代文学論を発表した。本書の中心登場人物は「移動する女性たち」である。山出が過去と現在の「移動する女性たち」の言葉の向こう側にとらえようとしたものは、国境を越えて移動することと書くことが、主体としての能動的なアイデンティティ確立の同じ1つのプロセスに関与しているような、極めて現代的な女性文学者のあり方である。本書はどの国の文学史的伝統にもとらわれず、多言語を駆使し、国境を越えることで批評家としての自分を作ってきた山出裕子の真骨頂と言える作品であろう。

あとがきにあるように、このエッセイ集は8年の長きにわたって続けられてきた研究の成果である。8年の間、「移動する批評家」は、多くの助成金に助けられて、「北へ南へ、東へ西へ」（p. 224）と、まだ確立されていない現代文学の流れを追って走った。研究の遂行にはキャンノンヨーロッパ財団2004年度欧州長期特別奨学金、カナダ政府2008年度カナダ研究論文助成金、文部科学省平成20–21年度科学研究費補助金がつぎ込まれ、刊行にあたっては日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金が交付された。と、すでに開く前からプレスティジヤスな雰囲気のある学術書であるが、一旦ページを繰れば、こうした重々しい名前の助成金が、すでに膨大に積み上げられていた研究と思索を形にすることに貢献したのみであったことが分かる。本書の最大の魅力は、まさに学術的伝統にとらわれない著者が、既成のものよりも「さらに深く遠」い「文学空間」に臨み（p. 224）、逸る心そのままのような探

究精神の赴くままに、自由に、喜ばしげに、様々な国の空の下を、あるいは誰のものとも定かならぬ記憶の世界を踏破してきた、その足取りがすべてのページに残っていることであろう。

密度の高い 220 ページには、1970 年代から 2010 年代にかけて、旅行者としてではなく異国の永住者として、欧米パブリックを相手に、文学作品（中には映像作品）を発表してきた「日本人女性」が次々に紹介される。8 章構成となっており、1 章ごとに 1 人から 3 人の作家が紹介され、その作品が解説される。多くの日本人読者にとって、ここで紹介されている名前のほとんどが初耳だろう。これほど絶対数が少ないカテゴリーの作家であれば、この本に集められている 12-13 人の作家だけで十分にエンサイクロペディアが作れると思う人もいるかもしれない。しかし、本書はエンサイクロペディアではない。

本書には前半と後半で大きく 2 つの異なるタイプの「移動する女性文学」が登場する。まず第 1 章で「1970 年代フェミニズム」という「移動する女性文学の起源」(p. 8)が語られる。登場するのは大庭みな子と津島佑子。第 2-3 章では、そうしたフェミニズムという「起源」に遠く端を発し、90 年代から 2000 年代にかけて花開いた「新移民作家」が登場する。代表的作家は、ドイツで活躍する多和田葉子、フランスと日本で詩を書く関口涼子、ケベックで多文化主義フランコフォンの誉れとなったアキ・シマザキ。フェミニズムという思想が「発見」し、また生み出した、これら作家たちは、皆成人してから日本を去り、英語ではない欧米の国と言語を選んで自己表現するという特殊な作家アイデンティティを自ら選んだ人たちである。最初の 3 章では、その後本書を通過することになるほぼすべての批評概念が打ち出されており（「文化翻訳」、「混血性」、「中間の空間」など）、山出はウルトラコンテンポラリーなこの 3 人を通して、大きく「移動する女性文学」の基本となる女性作家モデルを提示しようとしたものと思われる。

第 4 章から、紹介される作家のタイプがガラリと変わる。ここから登場するのは、前章の作家たちよりも古典的な意味での「移民」作家、つまり歴史的、民族的、社会的、経済的な事情によって運命的に異国に生まれてしまった女性たちである。フェミニスト文学から「日系」文学へ、2 つの世界の橋渡しをするのは、第 4 章で山出が愛情をこめて紹介している在日韓国人 3 世作家、李良枝（イ・アンジ）である。国籍から見れば日本人ではないイ・アンジが、戦後高度経済成長後の日本を去り、欧米で知的アイデンティティを

自ら作り上げた現代女性たちと、20世紀初めに北米やブラジルに集団移住した、識字率も定かではない女性たちの娘や孫という、普通であれば出会うはずもない女性たちの仲介役を果たしている。これは、けだし象徴的と言うべきであり、我々はここに著者からのある種のメッセージを聞き取ることもできよう。第5-6章では、日系カナダ人のヒロミ・ゴトー、ケリー・サカモト、リンダ・オーハマといった人々が紹介される。第7-8章では、日系ブラジル人の弘中千賀子、テルコ・オダ、カレン・テイ・ヤマシタが紹介されている。

山出のオリジナリティは、こうした異なるタイプの作家や作品を論じるにあたり、巻頭で提示した「フェミニズム」の立場を忠実に守っているところにあるだろう。「無国籍」で「フェミニスト」的な最も現代的な作家たちから、旧世代の記憶としての歴史から今生きるべき現実を探る日系移民の女性たちへとさかのぼることで、「移動する女性文学」の系譜を現代的に書き換えているのである。『移動する女性たちの文学——多文化時代のジェンダーとエスニシティ』は、エンサイクロペディアではなく、エッセイの集大成でもない。本書は、1970年代に「発見」された「女性文学」（あるいは女性作家たち）が辿った40年の軌跡を、「移動」という非常に斬新で普遍的な観点から再構成し、それによって21世紀の文学潮流のある方向性を示そうとするような、現代文学史の理論書なのである。

こうした内在的クオリティを超えて、本書はもちろん、グローバル社会における文学のジェンダー研究の新しい可能性を提示している。どのような可能性かを理解するためには、「旅と女性」の結びつきが、西洋近代の中流社会において長く禁忌であったこと、また今もそうであることを理解する必要があるだろう。そして、1970年代から90年代のフェミニズムはまさしく、この点において制度的文学史を批判したということ。

1970年代、新しい批評の波は多くの文学ジャンルを発見したが、そのうちの1つに過去の作家による「旅の手記」もあった。19世紀初め、市民社会の欧州への到来とともに現れ、自由人として、あるいは「非文明」世界の観察者として手記を残した旅行者たちは、もちろん圧倒的に男性であった。18世紀の放浪者小説とも重なるスタンダール(Stendhal)の旅の詩、1850年代のブルジョワ作家たちからロチ(Pierre Loti)と続く東洋旅行記、リヴィングストン(David Livingstone)、コンラッド(Joseph Conrad)という探検家の系譜、そしてレヴィ・ストロース(Claude Lévi-Strauss)からデスコラ(Philippe Descola)

に続く人類学者によるフィールドワークの忠実な記録まで、西洋人男性による「移動の文学」は豊かでヴァラエティに富んでいる。文化史家ジャネット・ウォルフ(Janet Wolff)が言うように、19世紀欧州人にとって、長旅は中流階級以上の男性にのみ許された特権だった(Wolff, 1995, p. 116)。19世紀フランス文学史の紀行文学を研究したファン・デン・アベール(Georges Van Den Abbeele)が慎重に結論づけているように、「西洋文明が持つ旅の概念とそこから生まれる手記は、一般的に言って、家父長的な価値とイデオロギーを伝え、教え込み、強調する道具であった」(Van Den Abbeele, 1992, p. 125)。

こうした文脈において、欧米の中流階級では今でもなお、「移動する女性たち」の手記がある意味「あってはならないもの」とみなされているのは想像に難くない。19世紀にサハラに滞在したイザベル・エベラルール(Isabelle Eberhardt)の日記の1989年における刊行が現代フランスのブルジョワジーに大きなショックを与えたことを覚えている人も多いだろう。その2年後、アメリカ映画『テルマ&ルイズ』が世界的ヒットとなった。もちろん、この間にはフローレー(Maria Frawley)やカレン・ローランス(Karen Lawrence)、そしてベネディクト・モニカート(Benedicte Monicat)ら優れたフェミニスト文学史家たちによる、男性の紀行文学史のネガであるような「移動する女性たち」の文学史が書かれていた。2008年には、カナダのマーゴット・アーヴィン(Margot Irvine)による19世紀の旅行記のジェンダー分析が、1980年代のプロブレマティックを一新して現れた。現在でも、西洋文学史が作られる現場においては、「移動する女性たち」の文学が包摂するサブヴァーシブな制度批判の力は衰えていない。それどころかまったく反対であるように思われる。

とは言え、男女の言説の違いの分析が西洋の伝統であるコロニアリスティックな旅行観への批判と分かちがたく結びついてしまったこの分野は、西洋人旅行者の自己批判以上に理論的突破口が見出せない状況となっているように見える。今後、緊急に必要とされるのは、国境を自由に横断するような複合的視点であろう。それだけではなく、「移動する女性」の表象が民族の歴史と文化によって違うことを理解した上で、彼女たちの出自によって西洋近代に確立された「家父長的価値」との近接度をはかるべきだろう。例えば、山出も述べているように、古典文学以来多くの女性による「放浪記」を持つ日本文化を背景として世界に旅立った女性は、女性の旅に性的放縦の意味を自動的に付与し、無意識に断罪するフランスのブルジョワ家庭に育った女性

とは違った旅の仕方をするだろう。さらに、本書で紹介されている日本人女性はそのほとんど全員が欧米へ旅立ったのだが、アジアやアフリカへ旅立った女性たちがどのような現代的アイデンティティを作り上げているのか、非常に興味深いところである。

『移動する女性たちの文学——多文化時代のジェンダーとエスニシティ』は、著者の長い情熱と経験に支えられた密度の高い文学批評の本であると同時に、初めて日本人の視点を紀行文学のジェンダー研究に持ち込んだ貴重な1冊である。

(かのう ゆきこ 成安造形大学非常勤講師)

参考文献

- Irvine, Margot (2008), *Pour suivre un époux : les récits de voyage des couples au XIXe siècle*, Québec, Nota Bene.
- Van Den Abbeele, Georges (1992), *Travel as Metaphor : From Montaigne to Rousseau*, University of Minnesota Press.
- Wolff, Janet (1995), *Resident Alien. Feminist Cultural Criticism*, New Haven & London, Yale University Press.